

大学の教員養成課程でも動物飼育体験を

長谷川節子[†] (栃木県獣医師会学校飼育動物委員会委員長)

1 はじめに

栃木県獣医師会学校飼育動物委員会は平成11年から小学校での動物飼育を支援する活動を行っている。ウサギを使ったふれあい授業、訪問飼育指導、教員研修会、シンポジウム、市民公開講座等、様々な活動を展開する中で、私たちは獣医療の世界にいたるだけでは知りえない多くのことを学ぶことができた。子供の成長過程に動物が大きな影響を与えることを確認できたことは大きな収穫であったし、動物とふれあう子供たちの輝くような笑顔にどれだけ勇気づけられたことか。反面、飼育現場での様々な問題にも直面した。閉鎖的な教育現場に立ち入ることの難しさ、常に付きまとう予算不足の問題、そして教師の指導力不足。当委員会では県教育委員会と委託契約を結び、平成16年から毎年夏休みに県内全小学校の生活科担当の若手教師を対象に飼育動物に関する教員研修会を実施している。意欲も能力もありながら、動物飼育経験のないまま飼育を任せられ、悩み、苦勞している教師たちが、我々の研修を受け、やっと少し自信が持てるようになったと喜んでいる。そんな姿を見るたびに、もっと早い段階できちんとした飼育体験を積み、自信を持って指導に当たれば、飼育現場の実態ももっと改善されるだろうに、と感じていた。そのような中、平成22年に白鷗大学で、また23年には白鷗大学と宇都宮大学で、それぞれウサギを使ったふれあい授業を行う機会を得、さらにアンケート実施により学生の生の声を聴くことができたので紹介したい。

2 授業実施に至る経緯

小学1、2年生が学ぶ生活科では、命の大切さを教えるために動物飼育を勧めているが、全国の教育系大学の中で、生活科の講座を持ち、専任の教授を置く大学はまだ数校である。生活科という科目がありながら何故なのか、理解に苦しむところであるが、社会科や理科の教官が兼任しているところが多いようである。そのような中、白鷗大学では元小学校校長を非常勤講師として招き、

年間計画を立てて週1回の生活科授業を実施している。講師は校長時代から小学校での動物飼育にご理解のある方で、大学生に飼育体験をさせることの重要性をしっかりと認識しておられたため、当委員会の前委員長に授業を依頼されたという経緯で、我々は外部講師として、年1回「生活科概説Ⅰ」90分授業2時限を担当している。一方、宇都宮大学では複数の講師が生活科授業を担当しており、その中の現役の小学校教師が担当している「生活科教育法」90分授業の内の60分を我々が使わせていただいた。

今回は両校ともに個人的なつながりから受け入れていただいたが、以前、大学当局に直接ふれあい授業の実施を申し入れ、素気なく断られたという経験もしている。

3 授業内容

①白鷗大学教育学部

日 時：平成23年11月24日(木)

「生活科概説Ⅰ」

3時限目 13:05～14:35 受講生 187名

4時限目 14:45～16:15 受講生 46名

②宇都宮大学教育学部

日 時：平成23年12月9日(金)

「生活科教育法」

14:30～16:00 受講生 44名

授業の進め方は、両校とも前半講義、後半実習を行う形式で、講義では当委員会作成のCDを使用し、学校で動物を飼う意義や、ウサギ、鶏等小学校で飼われる主な動物の飼育方法について説明した。今回、白鷗大学では、日頃学生が感じている疑問や悩み、また飼育体験等について事前にアンケートをとり、それに回答する形式も取り入れた。質問内容では、動物の飼い方や子供への接し方等現役の教師と同レベルの質問が多く、さらに動物に対する苦手意識をどう克服したらよいかといった前向きな質問もあり、学生たちが動物飼育に不安を感じつつ、真摯に取り組まなければならないと考えていることが窺えた。これらの質問や悩みに、委員会で検討を重ね、ひとつひとつ丁寧に回答できたため、充実した授業になったと大変好評であった(表1)。

[†] 連絡責任者：長谷川節子 (栃木県獣医師会学校飼育動物委員会)

〒320-0032 宇都宮市昭和3-1-17 ☎028-622-7793 FAX 028-621-9660 E-mail: tochivet@viola.ocn.ne.jp



図1 白鷗大学授業風景

受講生が多かったため、大学側が体育館の使用を特別に許可してくれた



図2 宇都宮大学授業風景

授業が終わっても、ウサギを放そうとしない学生

表1 白鷗大学授業前アンケート（受講生：1学年生 150人 2学年生 61人 3学年生 22人）

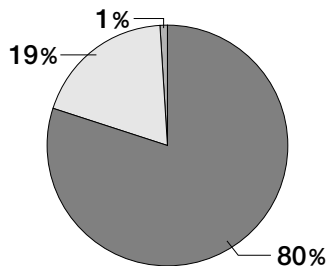
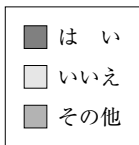
No.1			
あなた自身、生き物と触れ合ったり、飼育することは？			
	男	女	合計
苦にならない	33	82	115
抵抗がある	9	48	57
全くできない	0	1	1
体質的無理	0	1	1

飼育活動に関する不安や悩み、疑問等第8回の獣医師による講義・実習で取り上げてほしい内容や希望、飼育に関する質問等について		
○正しい飼育法・えさ・環境・子供への注意事項、正しい抱き方、ウサギの正しい世話、適切な動物の入手法・休業時の世話の工夫		44
○動物の病気やけがへの対応・兆候・動物の病気や弱った動物の処理・教師が動物の体調を管理するのか		25
○動物への恐怖心や苦手意識を持つ・嫌がる・汚いと嫌がる子供への対応、アレルギーの子供への対応		22
○生活科で飼育するのに相応しい動物・イヌはなぜ飼育しないのか		17
○動物の死への対応・正しい処理の仕方・子供がショックにならない対応の仕方、子供に見せていいのか		14
○動物の生態について知りたい		4
○是非動物に触れたい		4
○「ブタの学校」のように子供に食べさせていいのか		2
○動物にとって子供に飼育されることは良いのか		1
○動物の検査は適正にやっているのか		1
○学校の飼育に関する予算（えさや設備）の実情		3
○教育委員会や学校と獣医師との連携はどのようになっているか		2
○なぜ獣医師を目指したのか		1
○教師を目指す自分自身が動物や生き物が苦手・苦痛・アレルギー・克服法を知りたい		16

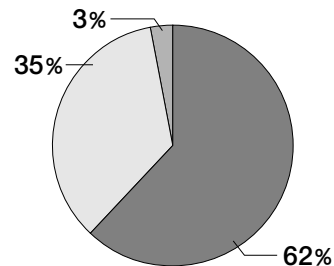
No.2						
あなたが小学校低学年のとき、触れ合ったり、世話・飼育をしたりした動物や生き物						
動物	鳥	水中生物	昆虫			
ウサギ	134	ニワトリ 88	キンギョ 66	カブトムシ	18	
ハムスター	37	ヒヨコ 4	メダカ 50	チョウ	17	
イヌ	28	インコ 21	カメ 32	カマキリ	8	
ネコ	15	クジャク 12	ザリガニ 29	クワガタ	6	
モルモット	7	チャボ 11	コイ 12	カイコ	5	
リス	2	アヒル 6	カエル 11	スズムシ	4	
その他	1	カモ 3	オタマジャクシ 6	カタツムリ	3	
		ウコッケイ 3		トンボ	3	
		カラス 2	グッピー 4	その他	10	
			イモリ 4			
			カニ 2			
			ドジョウ 2			
			その他 2			

小学校低学年の子供が飼育したり触れ合ったりするのに相応しいと考える動物や生き物						
動物	鳥	水中生物	昆虫			
ウサギ	142	ニワトリ 53	メダカ 33	カブトムシ	10	
ハムスター	32	ヒヨコ 10	キンギョ 30	チョウ	11	
モルモット	19	チャボ 7	カメ 12	クワガタ	3	
イヌ	16	セキセイイ 5	ザリガニ 11	スズムシ	2	
ネコ	5	ンコ	サカナ 7			
その他	1	インコ 2	カエル 5			
		その他 3	オタマジャクシ 5			

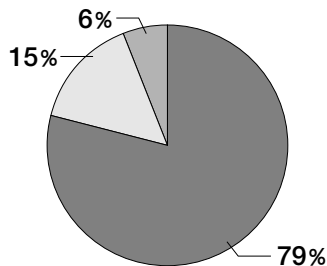
①動物を飼った経験がありますか？



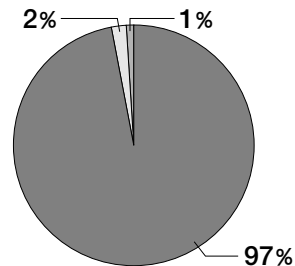
②ウサギは実習で触りましたが、ニワトリに触ることはできますか？



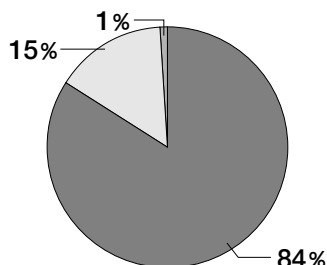
③ウサギ、ニワトリ等の動物は好きですか？



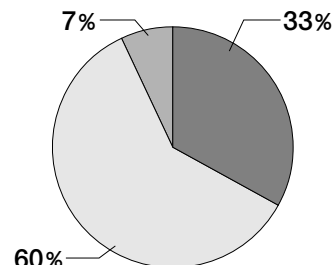
④小学校で動物を飼うべきだと思いますか？



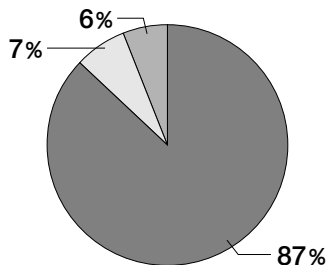
⑤生活科で動物飼育(ウサギ、ニワトリ)が勧められているのを知っていますか？



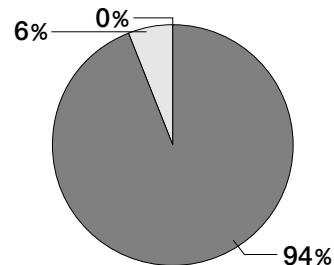
⑥教師になってすぐに飼育指導を任された場合、自信を持って臨めますか？



⑦今回の授業でウサギ、ニワトリの生態、飼育方法について理解できましたか？



⑧教師になってから、ウサギを使ったふれあい授業を行ってみたいですか？



⑨今回の授業について感想をお聞かせください。

〈回答〉

- ・命の大切さを子供たちに教えるためには学校での飼育は大切だと思う。
- ・ウサギを使った授業がいかに子供の発達に重要か分かった。
- ・命の大切さ、尊さを子供たちに教えていきたいと思った。
- ・オスとメスの違いを実際に見ることができて良かった。
- ・ウサギの生態や飼い方について詳しく知ることができ、勉強になった。
- ・飼育する前に生態を学ぶことは大切だと思った。
- ・ウサギの心音を初めて聞いて感動した。その速さにびっくりした。
- ・ウサギに初めて触れて、良い経験になった。他の命を知るための授業だった。
- ・ウサギの抱き方が分かって良かった。
- ・ウサギに不安や怖さを与えないように触れ合うことが大切だと思った。
- ・ウサギを飼いたくなった。
- ・ウサギが可愛かった。癒された。楽しかった。
- ・やはりウサギは怖かった。

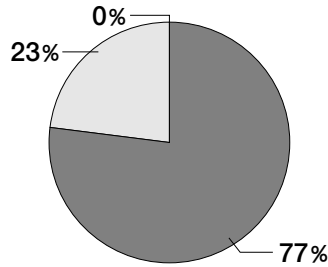
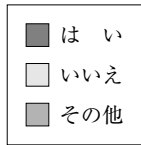
⑩栃木県獣医師会は学校飼育動物支援事業に取り組んでいます。ご意見ご要望あればお聞かせください。

〈回答〉

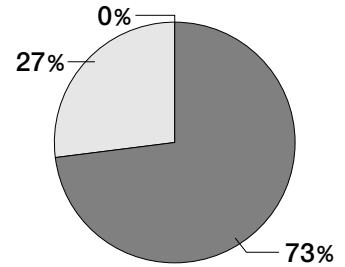
- ・今回はありがとうございました。分かりやすい説明で参考になりました。
- ・学校飼育のウサギたちの事件が減るようお願いします。
- ・とても良い取り組みだと思います。子供のため、動物のために頑張ってください。
- ・人以外を診療、世話できるのが素直にすごいと思いました。
- ・一回だけでなく何回か来ていただいで、もっと詳しく知りたいと思いました。

図3 2011年白鷗大学 ふれあい授業アンケート (12月1日(木) 3限 173名 4限 20名 計193名)

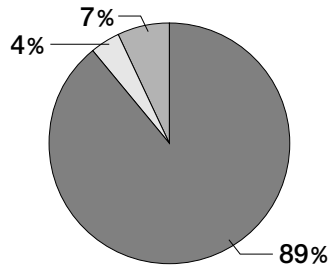
①動物を飼った経験がありますか？



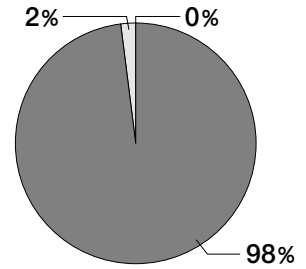
②ウサギは実習で触りましたが、ニワトリに触ることはできますか？



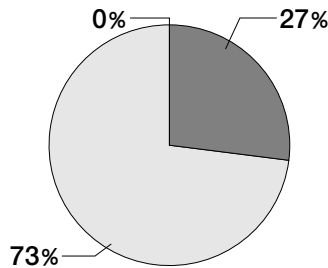
③ウサギ、ニワトリ等の動物は好きですか？



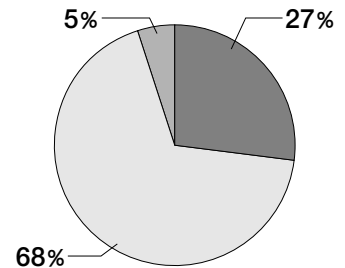
④小学校で動物を飼うべきだと思いますか？



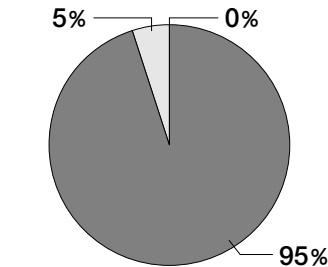
⑤生活科で動物飼育(ウサギ、ニワトリ)が勧められているのを知っていますか？



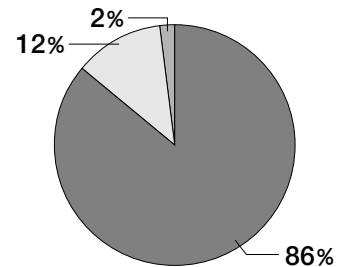
⑥教師になってすぐに飼育指導を任された場合、自信を持って臨めますか？



⑦今回の授業でウサギ、ニワトリの生態、飼育方法について理解できましたか？



⑧教師になってから、ウサギを使ったふれあい授業を行ってみたいですか？



⑨今回の授業について感想をお聞かせください。

〈回答〉

- ・命の大切さを子供たちに教えるためには学校での飼育は大切だと思う。
- ・ウサギを使った授業がいかに子供の発達に重要か分かった。
- ・命の大切さ、尊さを子供たちに教えていきたいと思った。
- ・ウサギに初めて触れて良かった。嬉しかった。
- ・ウサギが可愛かった。温かかった。癒された。飼いたいと思った。
- ・ウサギの心音を初めて聞いて、早いのに驚いた。
- ・貴重な体験ができて良かった。子供の視点でウサギと接することができて良かった。
- ・ウサギの抱き方や飼育の知識を学べて良かった。
- ・子供は動物から多くのことを学べると思った。
- ・命の大切さを教えるためには、しっかりとした飼育をし、触れ合うことが大切だと思った。
- ・学校で動物を扱う状況が分かった。
- ・教員になって是非このようなふれあい授業を行いたい。

⑩栃木県獣医師会は学校飼育動物支援事業に取り組んでいます。ご意見ご要望あればお聞かせください。

〈回答〉

- ・他の県への呼びかけなど。
- ・子供たちに動物と触れ合う機会を与えるのは素晴らしいことだと思います。
- ・ウサギ、ニワトリだけでなく、もっといろいろな動物を飼いたいと思います。

図4 2011年宇都宮大学 ふれあい授業アンケート (12月9日(金) 受講生44名)

実習は、今まで我々が小学校で行ってきたふれあい授業と同じ形式で、ウサギを使い、10名程度のグループに分かれて実施した。初めて聴くウサギの心音に歓声が上がるのは子供たちや教師対象のふれあい授業と同じ光景であったが、ここでも教師になった時にどう指導したらよいのかと真剣に問う声の多いことが印象的であった(図1, 2)。また、学生の中には小学生の時に我々の行ったふれあい授業を受けたという者も数名おり、微力ながらも継続して活動してきた歳月の重みを実感した。高く評価していただいた授業ではあるが、さらに発展させるべく、我々がやっている小学校でのふれあい授業に、教育実習として学生を参加させることも検討している。

4 アンケート結果

白鷗大学は翌週の授業で、宇都宮大学は当日授業後に、それぞれアンケートの回答をお願いした(図3, 4)。両校ともほぼ同様の結果となっている。問①8割の学生が動物を飼った経験があり、問②3割が鶏には触れられないと回答。問③8割が動物は好きで、問④ほぼ全員が小学校で動物を飼うべきだと答えている。問⑤は新学習指導要領に関する質問であるが、白鷗大学は8割が知っていると答え、宇都宮大学は7割が知らないと答えている。白鷗大学は一人の講師が年間のカリキュラムを系統立てて作成するのに対し、宇都宮大学は複数の講師が分担するため内容にばらつきが生じるのではないかと推察される。問⑥約6割の学生が飼育指導に不安を持っているが、問⑦9割が今回の授業で飼育方法を理解してくれ、問⑧9割がふれあい授業をやってみたいと答えてくれた。2校だけのアンケートではあったが、ほぼ同様の結果であったことは興味深い。学生たちは、小学校で動物を飼うことはとても意義があると考えますが、指導に自信が持てず不安を抱えていることが浮き彫りになった。

5 考 察

平成20年に改訂された文科省の小学校新学習指導要領生活科では2年間継続して動植物を栽培、飼育することが必要な活動と位置づけられ、平成23年からは全面実施されているが、実際には、動物を飼育する学校は減ってきている。獣医師の中にさえ劣悪な環境で飼うくらいなら飼わない方がよいと考える者もいる。小学生に動物飼育を体験させることの必要性、重要性が叫ばれていながらまことに残念なことである。今回大学でふれあい授業を実施する機会を得、学生たちの切実な意見を直接聞くことにより、動物飼育に意欲と自信を持った教師を育てるためには、教員養成課程での飼育体験が是非とも必要であると実感した。小学校の新学習指導要領に獣医師の役割がはっきりと明記されているように、大学の教員養成課程でも、我々を積極的に活用することを是非検討していただきたい。獣医師が教育の現場に踏み込んでよいのかという意見も聞かれるが、動物の飼育方法を指導し、健康管理を担えるのは、周りを見渡してみても、我々獣医師しかいない。専門知識を生かし、支援できる分野がある限り、獣医師の社会貢献活動と位置づけ、積極的にかかわっていくべきではないだろうか。今後全国の教育系大学で飼育体験が取り入れられることを願い、できる限りの支援をしていくつもりである。さらに言えば、獣医科大学でも是非ふれあい授業を取り入れていただきたい。教師の動物飼育に対する指導力不足を指摘しているが、わが身を振り返ったとき、我々も初めからきちんと飼育指導できていたとは到底言えない。開業獣医師のみならず、獣医師であれば誰でも貢献できる活動である。現に当委員会の活動には県職O.B.の先輩方や、産業動物の獣医師たちも積極的に参加し、大いに貢献してくれている。専門知識を勉強する合間に、飼育指導方法もしっかりと体験した人間味豊かな獣医師を世に送り出したいものである。